

〔論文〕

ヨーロッパのまち並みとキリスト教文化¹⁾

黒柳志仁

名古屋学院大学国際文化学部

要 旨

ヨーロッパのまち並みの特徴の一つとして、旧市街と新市街があること、広場のカフェや道路がパヴェ（石畳）となっていること、まちの中心に荘厳な教会が建っていることなどが挙げられよう。ヨーロッパのまち並みとキリスト教の関係には深い関わりがある。そこでヨーロッパの人々の生活に視点を当て、日々のカフェ文化からまち並みに対する考え方や、そしてまちの中心に配置された教会の役割について、各時代の文化的背景から概観する。

キーワード：まち並み、カフェ、モザイク画、石畳、キリスト教文化

The European cityscape and the Christian culture

Yukihito KUROYANAGI

Faculty of Intercultural Studies
Nagoya Gakuin University

1) 本稿は、熱田生涯学習センターと本学共催で行われた学習プログラム（令和3年度前期）において執筆者が担当した講座『「ヨーロッパのなぜ」を学びませんか～ドイツ、フランスを中心に～』の資料を基に加筆修正したものである。

発行日 2022年10月31日

1. はじめに

本稿は3つの視点から、ヨーロッパのまち並みとキリスト教文化の関係について考察する。1つ目は「なぜ旧市街と新市街があるのか」である。旧市街地は中世の趣が残っているだけでなく、旧市街地全体が世界遺産に登録されていることがある。新市街の発達により、ローマ・カトリック教会の教会管区が行政区分にもなったことは、住民の戸籍管理をする上で大きく寄与した。古き良きまち並みを後世に残していこうとするヨーロッパの人々の生活を概観する。

2つ目の視点は「なぜパヴェ（石畳）と広場があるのか」である。広場のカフェ文化はヨーロッパの日常を楽しむ憩いの場所であり、まちの景観の一つにもなっている。フランスでは古くから石畳の舗装が多く、埃が立たないのでテラスを歩道に張り出して、広場で飲食するカフェ文化が育まれたという考えもある。また石や貝殻を加工し、絵画の材料に使用したモザイク画は、キリスト教絵画の技法にも影響を与えた。現代のまち並みにあるヨーロッパの石の文化について概観する。

3つ目の視点は「なぜ教会がまちの中心にあるのか」である。ヨーロッパでは荘厳な教会が今もなお保存されている。ロマネスク期以降に木造から石造の教会建築が増え、それは教会の永遠化を示し、一方で国王の墓廟として高い塔（尖塔）が教会につけられた。その要因となったロマネスクからゴシック時代の教会建築の変遷を、時代背景から概観する。

2. ヨーロッパの「美しさ」とは何か

ヨーロッパを旅すると、その町の景観や歴史、人々の生活観が記憶に残る。そしてその町の美しさは中世の時代から保存されているまち並みからも各都市に息づいた文化を感じることができ。まち並みの景観にある「美しさ」とは一体何だろうか。「美しい」を表すドイツ語 *schön* には奇麗、素晴らしい、快いという意味が含まれ、「歴史」を表す *Geschichte* には物語、共時的といった意味を含んでいる。日本語とは少しニュアンスが異なる。

日本の生活圏にあるまちの美しさとは、「美化」に表されるように、「清潔」という意味において用いられることが多いのではないだろうか。道路にはゴミ一つ落ちていない、落書きなどめったにない景観を美しいまちと表現してはいないだろうか。一方でヨーロッパを訪れてみると、世界的に有名な都市でも、「清潔」というより道路や電車、家屋の壁には落書きが目立つことが多いことがある。

まちの生活には清潔さは勿論大切であるものの、ヨーロッパで「美しい」と言われるまちの多くは、世界遺産に登録され、単体としての歴史的な建造物が美しいのではない。旧市街と呼ばれるように、観光をしても、整然とした古い「まち並み全体」に対して、そこに「美しさ」を感じられる要素がある。旧市街は、今日では新規の建物が規制されている場が多い。この旧市街のまち並みはどのように成り立ったのだろうか。

2.1 中世ヨーロッパの「旧市街」の特徴

旧市街はどのようにして成り立ったのか、歴史的な建造物が立ち並ぶ旧市街の「建物の用途」から歴史を探る。

ドイツの主な世界遺産²⁾ にアーヘン大聖堂、シュパイヤー大聖堂、ヴェルツブルク司教館とその庭園群、ヴィースの巡礼教会などがある。こうした歴史的建造物の地域には、中世(5世紀以降)から争いの絶えなかった地域でもあったため、旧市街の多くは、その周辺に中世ヨーロッパ要塞都市の景観を残している³⁾。要塞(ようさい)とは、地域の戦術的価値を高めるために構築された防衛的軍事施設のことである。

① まちを囲う壁

中世がはじまる5世紀頃から、まち並みにおける要塞の特徴は、壁、門、塔の三要素からなっている。それは「自らを守る工夫」として、中世都市のイメージ形成の重要な要素の一つをなした(すべての都市が要塞や水堀に囲まれているわけではない)。敵からの攻撃から身を守るため、家屋への道は入り組み、高低差を出すなどの工夫がなされた。

中世の都市はまちを囲う壁の外にも、周辺農村に連なっていくフォール(郭外地)やバンリュウ(市外都市領域)をもち、戦時には近隣農村を都市内に受け入れていた。つまり要塞は、農村地域と都市地域を分け、農民に対する非難空間を提供する役割もあった。

② 「封建社会」によって自らを守る工夫をした

11世紀から13世紀末までに、戦争や紛争にみられる外敵からの侵入の時代が終わり、中世ヨーロッパに典型的に発展した「封建社会」の枠組みが形成され、社会の安定をもたらした。封建制とは、君主の下いる諸侯たちが土地を所有して、土地の人民を統治する社会、政治制度のことである(図1)。これは日本における鎌倉時代の御恩奉公に類似している。ヨーロッパ社会は急速な成長と発展期を迎えている。毛織物工業と金融業の拠点として、都市の数と都市人口の顕著な増加がみられた。

2) 世界遺産：ドイツ46件、フランス45件。国別1位イタリア55件、中国55件、3位スペイン48件、4位ドイツの順。

3) 河原温『中世ヨーロッパの都市世界』山川出版社1996年86頁以下参照；高橋慎一郎(編)『中世の都市』東京大学出版会2009年45頁以下参照。

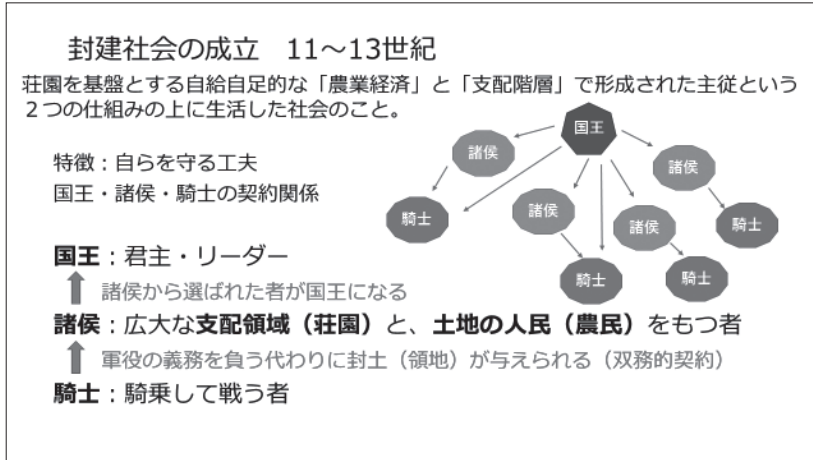


図1 封建社会のしくみ

2.2 中世ヨーロッパの「新市街」の特徴

13世紀のヨーロッパにおいて、「新市街」は都市の人口増加や経済発展に伴い、旧市街の周辺に新市街が作られるようになった（18世紀以降に発展をした古典主義時代からの建築を中心としたまち並みのことを「新市街」ということもある）。近世には都市は市民のための生活空間として、法整備が進められ区画整備されるようになり、その後ヨーロッパの都市計画の影響で、まち並みは整然とした美しい景観を保つようになる。その特徴を探ってみよう。

① 都市人口の増加から「新市街」が作られる

13世紀以降のヨーロッパは、イスラム世界や中国の諸都市の規模に比べると小さいが、1300

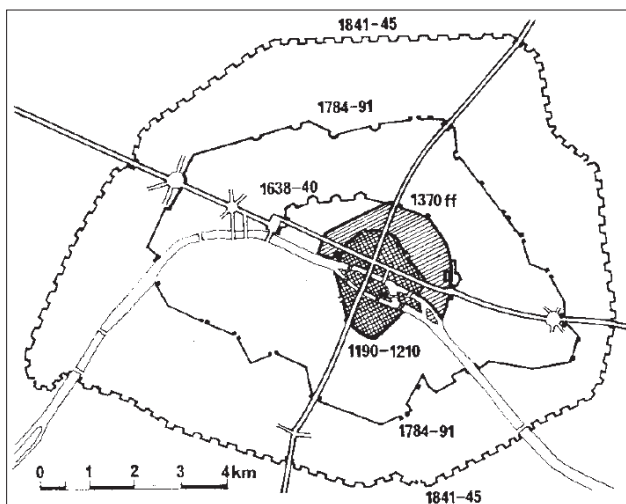


図2 パリ市域の拡大

年代に、人口5万人を超える都市としてパリ(20万人)、ヴェネツィア(11万人)、ミラノ(10万人)、ケルン(5万人)など、北フランス・フランドル地方、北イタリアを中心に大都市が形成された。

都市の人口増大や市域の拡大は、主として周辺農村からの人口流入が多く、移住民の分布は個々の都市のもつ経済的・政治的吸引力を示していた(図2)⁴⁾。

② 都市の公共空間

私的空間は、個々の市民の家や店舗、庭園、菜園が発展する。一方で、公共空間として教会、市場、広場、街路、ギルド(同職組合)が発展をした。

都市の領域は、教会による行政区分として小教区に分割され、それぞれの教区教会が置かれていた。小教区は都市民にとって最も身近な生活単位になり、13世紀初頭までに形を整えていく。教区教会におかれた教区司祭は、教区民の司牧にあたり、教区民の誕生(洗礼)から婚姻、そして死(埋葬)に至るまで関わっていた。カトリック教会の教会管区は行政区としての機能をもつことになる(江戸時代の寺請制度に類似)。小教区の数には都市によって異なっていたが、中世ではイタリアが多かった。また都市の行政区分として、街区(カルチエ)や行政区が設けられ、租税徴収や軍役の際の基本単位を構成した。フィレンツェでは、62の小教区と4街区、16行政区に分けられていた。

また貴族を中心に、血縁者は都市の一定区域に集住して、集団(コンソルテリア)として団体を形成し、安全確保や血縁関係を強固なものにしていた(図3)⁵⁾。

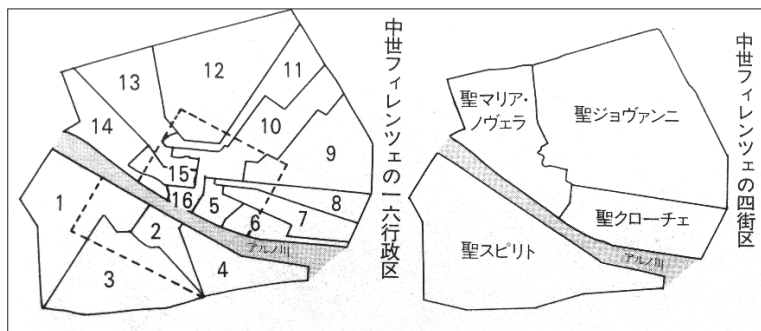


図3 ローマ・カトリック教会の管轄教区

③ 都市の広場

中世都市は、「市場広場」とそれに面して建てられた「市庁舎」、大聖堂と「教区教会」、そして都市を取り囲む「市壁」(外界との境界線)を都市としての視覚的中心としていた。

広場は、ヨーロッパの都市の形成過程において常に重要な核をなしていた。広場では聖人の祝

4) ブラウンフェルズ『西洋の都市：その歴史と類型』丸善出版1986年296頁引用。

5) 河原温『中世ヨーロッパの都市世界』山川出版社1996年38頁引用。

日には、地域的な定期市が開かれ、大都市では大市と呼ばれる国際的な市も開かれた。広場という空間は、プロセッション（宗教行列）やカーニバルなど、様々な祝祭・見世物の場であるとともに、処刑の場でもあり、都市民たちの政治的集会の場でもあった。広場にはしばしば泉が設けられ、「水の供給と管理」は中世の都市当局に委ねられた生活を守る極めて重要な問題で、イタリアをはじめ、都市の公共の泉はコムーネ（コムニオン：自治権を認められていた都市）の自治的権力の象徴としての意味をもっていた。

2.3 中世からの伝統を受け継ぐ年輪状のまち並み

ヨーロッパの都市において、中世の都市のシンボルとなるのは、古い中央の広場（Hauptplatz）を中心としたまち並みが一般的である。それを囲む建築物は、中世から現代までのバロック・ゴシック・ロココなどの一連の建築様式の変化にも見ることができる。この中央の広場の周りには、主要な都市施設である市庁舎（Rathaus）・大聖堂（Dom）・宮殿などが立ち並んでいる（旧市街地）。

中世の都市構造の特徴でもある中央の広場を中心とした年輪状（リング）の都市発展過程を、中世の旧市街のまち並みを残す現代の都市では確認することができる。この都市全体の年輪状の発展過程は、ヨーロッパが防衛上の理由から、市街地全体を守る要塞や市壁（Stadtmauer）を都市の成立時代から備えていたことに由来する（図4）⁶⁾。

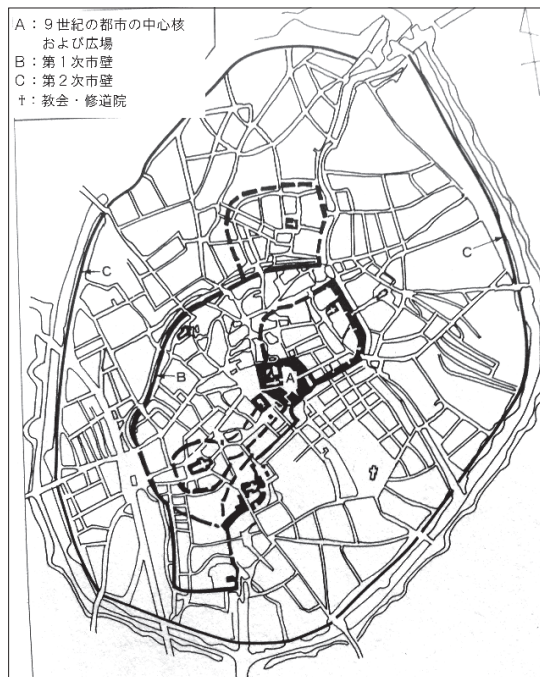


図4 13世紀フランス・トロワの都市空間

6) 前掲書, 36頁引用。

まちに人口が増加し、物資が集まることで囲郭の外にできた新しい郊外住宅（新市街地）と、それを取り囲む緑地を包含する形で、次々の囲郭の外側に築いた。この緑地は、農業生産のための農用地として、そしてその地に人口増加のための住宅地となった。

13世紀末になると、要塞機能を必要としなくなった古い囲郭は取り壊され、その跡地を環状道路や公園、公営住宅などの公共施設用地として利用した。これらから、結果として、年輪状の都市成長の図式ができ上っていったのである。年輪状の囲郭の存在は、限られた居住域で、いかに人口の高密度化と建物の高密度化を効率的に推し進めるのか、様々な都市生活の取り決めが円滑に機能するための要因になった。つまり限られた市街地での生活から生まれた都市共同体としての生活環境を、市民一人ひとりが理解し、責任をもって生活環境を維持していこうとする姿勢が、その後近世に至るまで、旧市街から新市街への移行に伴い、日常化していくことになった。

3. フランスと日本のカフェ文化

喫茶はヨーロッパでも親しまれているが、日本ではどのようにいつから広まったのだろうか、カフェ文化の歴史を概観する。

3.1 飲酒より喫茶にお金を使う名古屋の文化

名古屋の人々が喫茶好きを示すデータがある。総務省統計局によると2018～2020年に名古屋市民が喫茶にかけた一世帯当たりの平均支出は全国3位の結果であった⁷⁾。

岐阜市は名古屋市より、人口当たりの店舗数が多く、名古屋市と同様にコーヒーを注文すると朝ごはんまでついてくるモーニングサービス（中部地方）があるのも、喫茶が流行る理由とされている。一方で大阪市は喫茶店舗数が最も多いが支出金額は低い結果となっている。

喫茶にかけた一世帯平均支出	
1位：岐阜市	13,564円
2位：東京都区	11,470円
3位：名古屋市	10,964円
4位：川崎市	9,697円

日本の喫茶文化は明治以降に「カフェ」として西洋文化の影響を受けて広まった。「茶を喫する（飲む）」という喫茶のはじまりは奈良時代にはじまり、平安時代に天台宗の最澄が比叡山に茶の実を植えたと伝えられている。喫茶や食事を提供する休憩所の「茶屋」ができたのは、江戸時代に徳川幕府が五街道を整備してから広まった。徳川家康は名古屋城の正面一等地を町人街として大規模に整え、茶道や踊りなどの町人文化が盛んになった⁸⁾。日常的にお茶を楽しむ文化が生まれたのである。

7) 『総務省統計局家計調査』(2人以上の世帯) 品目別ランキング項目参照。

<https://www.stat.go.jp/data/kakei/5.html>

8) 沢井鈴一『碁盤割：町の成り立ちとくらし』堀川文化を伝える会2004年；高井尚之『カフェと日本人』講談社2014年参照。

3.2 カフェの起源はフランスとイタリア：時間と空間を楽しむ文化

「カフェ」とは英語や日本語でも常用される言葉だが、本来コーヒーを意味する「café（フランス語）」または「caffè（イタリア語）」が由来で、現在ではヨーロッパ圏で喫茶店の呼び名である。17世紀にトルコからヨーロッパ地域に伝わった東洋風のコーヒーショップから、1689年フランス・パリの店主フランソワが人々にコーヒーを楽しんでもらうために作り上げた店「カフェ・ド・プロコープ」がカフェのはじまりだった⁹⁾。その店は元々大理石などが用いられた公衆浴場であった建物を改装して、広々とした高級感溢れる店に作り上げた。その空間は外部との関係性が絶たれた異空間を演出し、瞬く間に民衆に受け入れられた。同時期に同じ通りに面したコメディ・フランセーズの新劇場もオープンし店は賑わいカフェ文化は人々に浸透した。フランス革命が起こる18世紀には、カフェは多くの芸術家や作家、詩人が集まるサロンとしての役割を担い、政治家や思想家が集まる議論を交わす場所へとカフェ空間は発展していった。

イタリアのカフェの歴史は1645年にヴェネツィアのサンマルコ広場周辺にコーヒーハウスが開店しカフェブームが起こり、人々が集う広場は多くのコーヒーハウスに囲まれた。イタリアで1720年に開業し現在も営業している店「カフェ・フローリアン」（カフェラテの発祥の地）は、店内に当時のロココ調の美術館のような装飾が残り、観光客に人気である。

3.3 パリのカフェの象徴・テラス席：自然環境やまちの景観を借りた空間

フランスは喫煙者が多かったが、当時から室内は禁煙というのがカフェのルールだった。そこで喫煙者のために設置されたのがテラス席だった。フランスは日焼けした肌が好まれ、季節によって日照時間が短いため、テラス席で日光を浴びるのもパリならではの過ごし方であった。一方でパリは古くから石畳の舗装が多く、埃が立たないからテラスを歩道に張り出して飲食する文化が育まれたという考えもある。

パリのカフェは、夏の気候の良いときには店の前の歩道に椅子とテーブルを並べて営業する。秋ごろになると、テラスをガラスの覆いでかこってしまうこともある。テラスとはラテン語で「高台、盛土」と意味する。1階部分で地面より少し高い部分をテラスと呼ぶ。カフェでの飲食を立ったままでカウンター（立ち飲みを原則とするカウンター前のスペース）やサル（室内の椅子とテーブルを並べたスペース）で摂る場合と、テラスの座席に座って摂るのでは料金が異なる。カウンター以外では約300円程度のサービス料が含まれる。サービス料は手間料ではなく、心ゆくまで空間と時間を占有することができるという料金。それがパリのカフェの魅力でもある（本を読む、手紙を書く、編み物をする、議論する）。

9) 玉村豊男『パリのカフェをつくった人々』中公文庫1997年15頁以下参照。

<p>パリのカフェの魅力（2つのサービス）</p> <p>1. カウンターは安さと簡便さというより親密なコミュニケーション</p> <p>2. サルとテラスは時間と空間の提供</p> <p>パリのカフェの3つの機能</p> <p>1. 喫茶店 2. 食堂 3. 酒場</p>

カフェには必ず酒類が置いてあるというのが、日本の喫茶店とは異なる¹⁰⁾。カフェは、パリという都市に住む人々にとってリビングルームである。人々はそこで自分の好きなようにくつろぎながら他人と談笑して楽しみ、他方、大勢の人々に囲まれながら孤独を楽しむ場でもある。

■欧米における歩道利用の規定の例¹¹⁾

規定項目	街路計画	歩行者通行ゾーン	利用可能ゾーン	デザイン条件
パリ	歩道幅員 2.2m以上	1.6m以上	有効幅員の3/1まで テラス幅は0.6m以上	仕切り設置・プランター等、 テーブル・椅子等・ パラソル・色彩
ミラノ	区間道路 区域道路	最低2m	歩道幅の2/1以下	仕切り設置・プランター等、 テーブル・椅子等・ パラソル・色彩
サンフランシスコ	基本街路以上	最低1.8m	建物全面ゾーン	仕切り設置・プランター等、 テーブル・椅子等・ パラソル・色彩
ポートランド	歩道幅員 3.6m以上	最低1.8m 一部2.4m	敷地全面ゾーン	特になし

■日本の路上利用に関する現行法規

許可	道路使用許可	道路占用許可
関係法令	道路交通法	道路法
条例	77条（道路の使用許可）	32条（道路の占用許可）
内容	道路で公示作業や露店等を出す場合は所轄警察署長の許可が必要	道路に工作物を設け、継続して使用する場合は所轄道路管理者の許可が必要

10) 日本は飲食店営業許可と喫茶店営業許可があり食品衛生法で、喫茶店での酒類の提供は禁止し、既製品を温め提供するなど食事を1から作れない。飲食店は人件費・光熱費、長時間による質の低下、食材ロスの観点から営業時間と売り上げを比例するようにしている。（『厚生労働省：食品衛生法』参照）

11) 井澤知旦（他）『オープンカフェ実験による 街路空間の活用に関する研究』日本建築学会計画系論文集第576号112頁以下参照。

日本は道路空間における営利的な行為は法律で禁止されており、道路の魅力化・活性化といった目的（定期間の歩行者天国の露店など）でなければ道路は使用できない。

3.4 カフェ文化：場所との関わり

日本のカフェは、喫茶店に求められるものは品質と値段であろう。最近では室内空間・着座スペースを以前より広い空間に設計する店舗も増えてきた。フランスのカフェ文化を辿るとどのような特徴があるのだろうか。フランスと日本を比較すると空間には以下の3つの特徴がある¹²⁾。

フランスのカフェ空間の特徴

1. 環境を借りる：自然（広場）を借景としたり一体化したり、周囲の環境や人々の営みを想起させる空間。
2. 境界をぼやかす：空間内部と外部をぼやかし境界を見失うカフェ。敷地外にも開こうとする空間。
3. 外との関係を断つ：空間内部と外部の関係を遮断しながら独自の世界観を演出するデザインが特徴になる空間。

日本と比較すると、フランスでつい長居してしまうような居心地の良いカフェ空間には、「場所との関わり」が感じられる。例えば眼前に広がる美しい景色を堪能できたり、賑やかな都市の道端で一呼吸つける自由な空間であったり、外部から隔離された日常と切り離された空間は、カフェを楽しむ間、まるで自分自身がその場所に溶け込んでいるかのような安心感があると言える。

4. ヨーロッパの石畳のはじまり

今ではヨーロッパのまちの景観にもなっている石畳。その歴史は紀元前ローマ帝国によって舗装されたアッピア街道がはじまりとされている¹³⁾。イタリアはアペニン山脈があり、産出する火山岩である玄武岩が敷石に使用された。ローマ帝国の拡大とともに首都ローマからフランス、ドイツなどに石畳は伝承されていった。道の舗装によってどのように都市が発達したのか考察する。

4.1 フランスの石畳

パリではじめて石畳で舗装されたのは、12世紀のフィリップ王（Philippe Auguste, 1165～1223）の治世に国内の環境整備であった¹⁴⁾。シテ島の王宮の近くで馬車が通る際、凄い勢いで泥を跳ねながら、生活ゴミや家畜の汚物などの泥からは異臭がしたようである。馬や人の通行で踏

12) 加藤匡毅『カフェの空間学：世界のデザイン手法』学芸出版社2019年24頁参照。

13) 上野景文『サンピエトリニ（ローマ石畳考）』

http://www.japanitalytravel.com/back/roma_rekisi/2008_11/11.html 参照

14) 玉村豊男『パリ旅の雑学ノート』中公文庫2009年158頁引用。

み固められた道も、雨が降ればぬかるみ、風が吹けば砂埃となった。台所のゴミや残飯も構わず道に投げ捨てられ、汚水も窓から道へと捨てる習慣があった。豚や鶏などの家畜は、餌を求めて道をうろついている状況だった。こうした中でフィリップ王がパリ市内のすべての道と広場の舗装を命じたのが石畳のはじまりとされる。王宮周辺からはじまり、徐々に石畳の舗装道路は拡大していったのである。

4.2 舗装道路によって通り名、番地が定まる

パリのまちは12世紀以降舗装がはじまったことで都市整備も進み、どのような小さな道にも名前が付けられ、番地がふられるようになった。パリの場合、通り名は人物名、職種、愛称など様々な由来がある。現在では道の名前は、角ごとの建物のプレートに書かれている(図5)¹⁵⁾。一番上に記された番号は区を示す。番地は、セーヌ河と平行していれば上流から下流へ、垂直方向なら河に近い方から遠い方へ、それぞれ番号が順に大きくなる。奇数番地と偶数番地は、道を挟んで左右に分かれている(図6)¹⁶⁾。こうした都市整備によって家族単位で住民を登録する戸籍が作成されるようになった。



図5 通り名のプレート

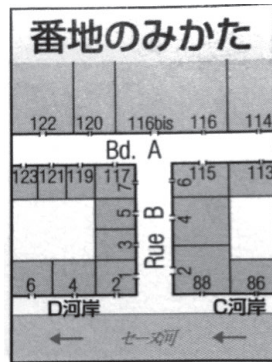


図6

フランスにおける舗道の3つの機能

1. ゴミを捨て場からの改善
2. 人や馬車が通行する
3. 住所の表示が定まる
4. 都会の情緒(環境整備)を演出する

4.3 石畳の模様

日本で舗道はほとんどがアスファルト舗装だが、パリには石畳が多い。フランスでもアスファルト(石油タールに碎石や砂を混ぜて固めたもの)は19世紀後半の近代都市形成期に使われ始

15) JTPパブリッシング(編)『ワールドガイド：ヨーロッパ2：パリ』, 2007年37頁引用。

16) 前掲書, 37頁引用。

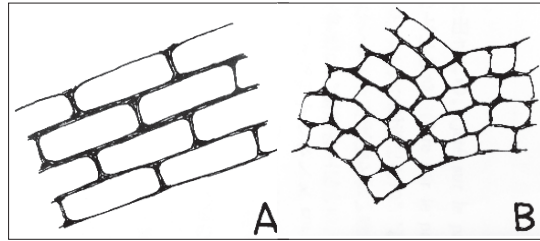


図7

めた。今もパリにはアスファルト舗道より石畳のほうが多い理由は、石畳は同じ材料で何度も補修ができ、吸水率が低く、汚れに強い利点もある。パリは比較的硬い岩盤（岩石層）の土壤にあり、石のほうがアスファルトに比べ耐久性があること、そして手間はかかるものの石を並べることでまちの景観への配慮でもある。石畳に使われる石は、主として玄武岩と砂岩。並べ方は次の二種類がある（図7）¹⁷⁾。

A 標準舗石

14～20センチの長辺をもつ直方体の石をレンガのように少しずつずらして並べる方法。

B モザイク舗石

一辺8～12センチのほぼ立方体の石を、扇形の模様を描くように並べる方法。

パリの歩道の約40%は、Bのモザイク舗石スタイルの石畳である。石畳は歴史を感じさせヨーロッパの情緒ある古いまちの景観に欠かせないものである¹⁸⁾。ただしデメリットとしては、パリの五月革命などの暴動の際には、石畳をはがし投石に用いられてしまうこともあった。

5. 石畳の模様にもられるモザイク画の伝統技法

ヨーロッパのまちの石畳の模様や技術にはどのような由来があるのだろうか。キリスト教における美術史の観点から概観する。

5.1 前期ビザンティン美術（4～15世紀）

教会の壁を飾るモザイク画を生み出した

ローマ帝国は元来、313年までギリシャ神話にみられる多神教の国だった。中でも主流であった信仰は、皇帝によって上層の人々が救われる、いわゆる皇帝崇拜であった。一方でキリスト教は一般の民衆や奴隷を救う思想であるため、徐々にローマ帝国内に浸透していった。3世紀キリ

17) 玉村豊男『パリ旅の雑学ノート』中公文庫2009年194頁引用。

18) ドイツの石畳には「躓きの石(Stolpersteine)」が敷かれている。これはヨーロッパ中に約61,000ヶ所にあり、ホロコースト犠牲者の名前、生まれた年、死亡した場所などが刻まれている。10cm四方の真鍮のプレート。

キリスト教は迫害を受けても民衆に広まり、ローマ帝国は民衆が支持するキリスト教を利用する政策に転換していく。この頃、ローマ帝国は衰退期にあり、民衆を団結する必要もあった。キリスト教は徐々にローマ帝国内に浸透していく結果となった。

- 313年「ミラノ勅令」によってコンスタンティヌス大帝の治世でキリスト教はローマ帝国で公認宗教となった。この政策によってキリスト教は保護を受けるようになる。信徒、教会が増加していった。ローマ帝国の政情不安定と入れ替わるようにキリスト教は浸透した。
- 392年テオドシウス帝によってキリスト教はローマ帝国の国教と定められた。
- 395年テオドシウス1世が亡くなり、相続分与でローマ帝国が東と西に分裂。
 - 東ローマ帝国：オーソドックス教会（「正統」の意、ギリシャ正教会とも言う）が展開。
→ビザンティン美術の発展
 - 西ローマ帝国：ローマ・カトリック教会（「普遍」の意）が展開。
→ロマネスク美術の発展

キリスト教がローマ帝国で国教となり、豪華な装飾で布教活動がはじまるのは4世紀以降になる。大規模な教会堂が造営され、教会の天井や壁には文盲の信者の教化を目的として、新約聖書、旧約聖書の諸場面の図像がモザイク画で描かれた。人物や建物などの対象物は「単純化」「図式化」され、物語の叙述に重点が置かれるのが特徴であった。

モザイク画（ラテン語「芸術的な」の意）…寶石・鉱石・貝殻・石、木などをちりばめて、図案・絵画などを表した装飾物のこと。この時代のモザイク画は、宮廷儀礼的な雰囲気を残しているのが特徴。人物像は正面向きで動きを排除した左右対称構図によって厳格に様式化され、ビザンティン様式の精神的・超越的な表現をしている。6世紀はイコン崇拝が高まり、聖母子や聖人の像が多く描かれた。
モザイク画は費用と時間がかかりすぎるため、9世紀からはフレスコ画が主流になる。

モザイク画は6世紀のユスティニアヌス大帝時代に黄金期を迎える。首都コンスタンティノポリスに建設されたハギア・ソフィア大聖堂はバシリカ式と集中式を融合させた教会堂である。東ローマの総督府が置かれた東イタリアの町ラヴェンナにあるサン・ヴィターレ聖堂のモザイク画がビザンティン時代の代表作となる。

5.2 後期ビザンティン美術（9世紀後半～13世紀初め）

フレスコ画でより豊かで力強い表現

後期ビザンティン美術はフレスコ画が中心になり、金地背景に縁取りによる鮮明で力強い印象が特徴。8～9世紀半ばにリアルな表現は偶像崇拜だとし、聖像破壊運動（イコノクラスム）が起り、一旦美術は衰退する。後期ビザンティン美術の人物表現に太い輪郭があり形式的なのは、リアルな表現は偶像崇拜だといわれないようにするためだった。

6. ゴシック建築を生み出した時代背景

まちの中心部に教会が作られ、石造りになり高い塔が作られるようになるのはゴシック建築の特徴でもある。その要因をヨーロッパにおける10世紀以降の時代背景から概観する。

ロマネスク美術は10世紀～12世紀半ばにかけて南フランスをはじめ西ヨーロッパ諸国に展開した建築・彫刻・絵画の様式のことを指す（東方は主にはビザンティン美術が栄えた）。

「ロマネスク」とは、ローマ風建築のことで、教会は重厚で立派で豪華で、それがローマ風建築（＝ロマネスク）と呼ばれたことが由来とされる¹⁹⁾。

ヨーロッパの美術史年代	
ビザンティン	4世紀～
ロマネスク	10世紀～
ゴシック	12世紀～
ルネサンス	15世紀～

6.1 前期ロマネスクの誕生（962年～）

962年にオットー1世が神聖ローマ皇帝に即位する。オットー朝から流れをくんだロマネスク美術は、10世紀後半にドイツとフランスから始まり、12世紀にはスペインまでいきわたった。しかしイタリアでは依然としてビザンティン美術の影響が強力だった。

前期ロマネスク誕生の時代背景と特徴として、以下の2点を取り上げることができる。

① イエス・キリスト没後1000年を迎えるこの時代に黙示録のテーマが流行

世紀末ともいえる1000年（イエス・キリスト没後1000年）はこの世が終わるというのが「千年思想」である。戦争や異常気象、病気の流行、飢饉など…²⁰⁾。それらはすべて新約聖書の「ヨハネ黙示録」に書かれている。この「ヨハネ黙示録」の話の中心は「最後の審判」のシーンであった。悪人は地獄へ、信仰篤い善人は天国へと、グループ分けされる。「最後の審判」のシーンは、ロマネスク時代のイメージソースとなって、信仰と美術が深く結びついた。

② 罪を悔い改め、聖地へ旅する巡礼ブーム

「最後の審判」で、地獄に審判が下されることを恐れ、大勢の人が罪を改めるために聖地を目指した。聖地はイエスの生地ベツレヘムや、イエスの埋葬地エルサレム、イエスが洗礼を受けたヨルダン川、12使徒ペトロが埋葬されたローマなど、北ヨーロッパからははるかに遠い地である。そこで、ターゲットとなったのは、使徒ヤコブの墓のあるスペインのサンチャゴ・デ・コンポステーラであった。巡礼の途中に立ち寄るのは聖遺物のある修道院や教会であった。聖遺物とは、聖人の遺骨や身につけたもので、多大なご利益があると信仰の対象になっていた。聖遺物は、教会同士で奪い合うほどであった。この当時美術品として聖遺物箱は豪華な装飾を施したものが作られた。

19) 『日本大百科全書』「ロマネスク美術」の項参照。

20) 11世紀にヨーロッパではハンセン病(らい菌による皮膚と神経を侵す慢性の感染症)で差別なども生じた。

6.2 盛期ロマネスク（1060年～）

盛期ロマネスクの時代背景について概観しておきたい。各地でキリスト教の「千年思想」が広がる中、1096年に聖地エルサレムの奪回をめぐり、十字軍の遠征が起こる（キリスト教とイスラム教の聖地奪回をめぐる戦い）。イスラム教は強大な軍事力を誇るイスラム帝国に成長した。次第に東ローマ帝国に侵入しエルサレムを占領する（図8）²¹⁾。

エルサレムはキリスト教の聖地でもあるため東ローマ帝国は西方キリスト教会に援軍を求めた。ローマ教皇はこの要請を受けて異教徒から聖地エルサレムを奪還する「聖戦」²²⁾を唱えた。1096年にローマ教皇の指揮下で十字軍が結成。イスラム帝国がエルサレムへ侵攻する度に、西欧では十字軍が結成された（計7回）。1270年十字軍の遠征は失敗のうちに終わる。

十字軍遠征の出来事は、キリスト教芸術にも大きな影響を与えた。その影響として、修道院の建つところに芸術が生じた厳粛なキリスト教文化である。11世紀から聖地回復のため、十字軍や聖遺物崇拜が盛んになり巡礼者が増えたことは、ヨーロッパ各地の文化交流に大きく寄与した。各地の素朴で独自の文化が関連してロマネスクという様式が形成されたのである。芸術の表現にある種の共通性が保持できたのは、キリスト教の普及と深化によるものだった。修道院を中心に繰り広げられたロマネスクの特徴は、石造りの修道院や教会堂、扉口や柱頭に施された石造彫刻、内部壁面のフレスコ画、また修道院の最も重要な活動の一つである聖書などの写本装飾に見ることができる。

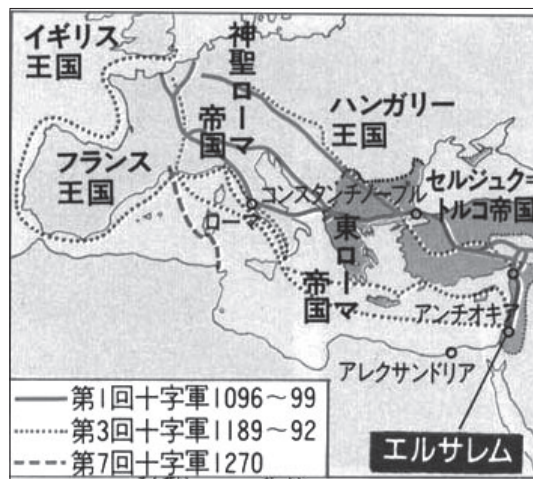


図8

21) 『世界史詳覧』 浜島書店2020年145頁引用。

22) 「絶対平和主義」 Pacifism（4世紀以前）…戦争を否定し、平和の実現を使命とする主張。「正戦」 Just War（4世紀以降）…正義や平和を守るために必要最小限のやむを得ない武力行使のみを容認する主張。「聖戦」 Holy War（11世紀以降）…神の名において積極的に戦いをしようとする主張のこと。

6.3 後期ロマネスク（1150年～）

後期ロマネスクの時代になると、教会建築において大きな変化が生じる。それは木造から石造になってアーケード型天井が定番スタイルになることである。

一つ目の特徴は、ロマネスク建築の最大の変化として、従来の木造天井から石造天井になったことで、教会全体が不燃性の石によって永遠化を表現したことである。教会の扉口のティンパム（正面入り口の上部を飾る半円形の部分（穹窿））や、柱の各部には聖書や聖人伝の主題の他、異形の動物や人物、抽象文様や植物文様も彫刻された。これらの彫刻は「枠の法則」により建築の枠の形に合わせて自由に変形させている。

2つ目の特徴として、壁画はモザイクの代わりにフレスコ画が主流となり、作風に自由度が増していったことである。教会内部の壁や天井にはフレスコ画が普及し、厳しいキリスト像や神々しいマリア像などが力強い筆致で描かれ、威厳のある超越的な雰囲気醸し出した。

フレスコ画（イタリア語「新鮮な」の意）…壁に塗った漆喰（しっくい：白土（しらつち）とも言う）が乾かないうちに、顔料を塗って筆で絵を描くもの。技法と表現力はヨーロッパ各地の教会で進化していく。

顔料とは着色に用いる粉末で、水やアルコールに溶けない物質。色は土、貝、鉱石、宝石などを材料として作成する。作成法は秘密のものも多く、絵画、織物でも高価な色は富と権力の象徴にもなっていく。

後期ロマネスクの時代には、キリスト教の千年王国の影響も受け、装飾写本が盛んに作られるようになる。写本挿画（しゃほんそうが）の分野ではスペインとイギリスで独創的な作品が制作された。スペインでは修道士のベアトッスの「黙示録注解書」が、強烈な色彩と大胆な構成が特徴のモサラベ様式²³⁾で描かれた。イギリスでは大陸のカロリング朝の写本を取り入れて、カンタベリーを中心に植物文様を伴う繊細な筆致の作品が生み出された。フランスでは修道院を拠点とする各地の写本工房で、ケルト・ゲルマン美術に由来する装飾的で象徴的なイニシャル押絵などが制作された。工芸品では象牙、金銀、宝石細工、エマーユ（七宝焼き）などが教会に関係する十字架、聖遺物箱²⁴⁾、祭具などの荘厳美術を生み出した。

23) スペインでは8世紀にイスラム教芸術が入り、キリスト教とイスラム教の混合美術が生まれた。これをモサラベ美術という。(参照作品：『ジロナとベアトッス写本』太陽をまとう女と龍、975年)

24) 聖遺物箱（せいいぶつばこ）とは、聖人の持ち物や遺骨を納めるもので、金銀宝石で飾られた。奇跡を起こすと信じられた聖遺物は巡礼者の拝観の対象になった。聖遺物がないと、参拝者が少なくなるため、骨が墓から盗み出されたこともあった。

■建築の特徴

年代	様式	特徴	建築例
3～7世紀	バシリカ式	キリスト教初期の建築様式。箱型の構造。ローマのホール建築（バシリカ）を基本としているためバシリカと呼ばれる。	旧サン・ピエトロ大聖堂（イタリア、390年頃）
4世紀～	ビザンティン式	バシリカ式正方形の建築の上に集中式のドーム天井を載せた様式。（東ローマ帝国の教会堂）	アヤ・ソフィア（トルコ、527年）
10世紀～	ロマネスク式	基本構造はバシリカ式で半円形アーチが天井に広がる（西ローマ帝国の教会堂）。ロマネスクは「ローマ風」という意味。フランス語では「空想」の意でもある。	ピサ大聖堂（イタリア1063年）ピザの斜塔が有名だがその横にある聖堂。
12世紀～	ゴシック式	高度に発達した石造技術により建築が可能になったもので、高くそびえ尖塔が特徴。この尖塔はボールト（アーチを一系列に並べる曲面構造）、アーチを直交させた交差ボールト、屋外に設けられたフライング・バットレス（アーチ状の梁）などによって支えられている ²⁵⁾ 。それによって内部の天井は非常に高く、外壁には高所に至るまで緻密な彫刻が施されている。自然に視線が上へ上へと導かれる仕組み。ゴシックとはイタリア人がドイツ人に対して野蛮な様式と軽蔑して「ゴート族の様式（ゲルマン民族）」から言い表したとされる。（印刷文字のゴシック体とは別）。	ミラノ大聖堂（イタリア、1386年） 白大理石と135の尖塔が有名。 ノートル・ダム大聖堂（フランス、1225年） ケルン大聖堂（ドイツ1248年）

6.4 ゴシック建築のはじまり（12世紀中頃～14世紀）

都市の中心に大聖堂の塔が建てられた要因とその時代背景

12世紀中頃、フランスから新しい美術様式がはじまった。それをゲルマン民族のゴート族にちなんで「ゴシック」と名付けられたことに由来がある²⁶⁾。

1137年に修道院長シュジェールは、歴代フランス王朝の墓廟（ぼびょう：聖人の墓で崇拜の対象となった場所）でもあったサン・ドニ修道院の改築にあたる。聖堂を壮大な建築にすることで、王権を神より授けられた完璧なものとして視覚的に印象づけようとした。これがゴシック建築のはじまりとされる。それ以降の大聖堂の建築はサン・ドニ修道院に倣ってつくられたとされ

25) 桐敷真次郎『西洋建築史』共立出版2001年86頁参照。

26) ゴシック美術とは「西ヨーロッパ中世後半に行われた美術。ロマネスク美術につき、その発展の結果として生まれ、12世紀中期から準備期に入り、13世紀にフランス、イギリスにおいて明確な様式として成立し、さらに西ヨーロッパ全土に波及し、つづく2世紀間に発展・変化して、15世紀初めからイタリアで形成されるルネサンス美術が代表する近世美術にとって代わられるまで存続した。ゴシック Gothic の名称は、バザーリルネサンスのイタリア人が中世建築を粗野な蛮族ゴート人 Goth のもたらしたものとして非難したことに由来するが、19世紀以来、西ヨーロッパ中世美術の一樣式をさす美術史上の用語として適用されるにいたった」（世界大百科事典「ゴシック美術」の項を参照）。

る（神権政治の影響²⁷⁾）。

聖堂はその都市を代表するものとなり、各都市で争うように大型化した。ゴシック建築の特徴は、空高く伸びた塔と、大きな窓がつけられたことである。

ゴシック建築の時代になると、神の光を現実の光の演出によって象徴させたステンドグラスが特徴になる。ゴシック建築は、厚い壁が要らなくなったことで、壁にはステンドグラスがはめ込まれる。フランスの修道院長シュジェールはステンドグラスのことを「内陣部にあふれる神のイメージ」と表現した²⁸⁾。石造で重厚な壁をもつロマネスク様式に比べ、柱で屋根を支える尖塔（せんとう）アーチ構造になったゴシック様式では、聖堂内に光が満ち溢れるようになった。

聖書の物語や聖人伝を扱ったステンドグラスは、ゴシック美術を代表するだけでなく、文盲の人々にとって目で読む聖書の役割も果たした（アトリビュート）。しかし、平面性と枠取りで代表された単純な形が持ち味のステンドグラスは、繊細な絵画に近づくほど力強さの魅力が失われるという矛盾を抱えていた。ステンドグラスは1250年頃を最盛期として次第に小規模となり衰退に向かう。

6.5 最後の審判は生じなかった—信徒が求めたものは「癒し」

ロマネスク時代の彫刻は、建築の枠の組み合わせに合わせた彫刻が主体であったが、ゴシック時代になると、柱の一部のような人物像は、次第に独立した丸彫りとなり、表情にも人間的な感情表現がなされた写実表現がみられる。また、厳格に満ちた神の像よりも、やさしい慈愛に満ちた聖母像が好まれた。これらの聖母像は共通してS字型に体をくねらせた優美な姿勢と体の動きに合わせて流れるような流麗な衣の襞（ひだ）、折り目が特徴となる。14世紀になると「祈り」がプライベート志向になる。つまり個人的に神と向き合うことを求めるようになる。その結果、厳格なポーズで正面向きのマリアよりも、優しく受け入れてくれるマリア、母子愛の典型としてのマリア像のほうが、親密感や安らぎを得られるので、そこに癒しを感じさせ人気が上がった。また、悲しみを共感するテーマとして、人々の罪を背負って十字架上で死んだ息子を抱える母としての姿がたくさん作られた。これをピエタ²⁹⁾という。

6.6 ルネサンス（フランス語で「再生」の意）のはじまり

こうした時代の中で14後半～15世紀に起こったのがルネサンスだった。イタリアの地ではじまり、全ヨーロッパに広まり、芸術や思想の革新運動となった。

27) 王権神授説または神授王権：「王権は神から付与されたものであり、王は神に対してのみ責任を負い、また王権は、人民はもとよりローマ教皇や神聖ローマ皇帝も含めた神以外の何人によっても拘束されることがなく、国王のなすことに対しては、人民はなんら反抗できない」とする政治思想のこと。

28) 早坂優子『西洋美術史入門』視覚デザイン研究所32頁引用。

29) 「ピエタ」とは「キリスト教美術において、キリストの遺体を膝の上に抱き悲嘆に暮れている聖母マリアの姿を表した礼拝図像のこと」（『日本大百科全書』「ピエタ」の頁より引用）。

ルネサンスは、様々な社会の反駁から生じた要因がある。宗教的束縛から人を解放しようというものも、その一つだった。絵画でも宗教から解放された感性により斬新な才能が数多く開花した。

ここで注目したいのは、誰のための芸術かという問いである。これまでのロマネスクの時代、作品の題材や描く場所を提供したのは教会であったものの、その絵画作品の「表現」を束縛したのも教会であった。ルネサンスの中心地がカトリックの中心であるイタリアのローマ教皇のもとで起こったのもその理由である。

ルネサンスは「自己」の発見でもあった。芸術家たちは神の姿よりも、人間の肉体や個人の顔、魂を表現するようになる。この世に1つしかない「自己」という意識に目覚めていくようになる。

7. おわりに

世界の文化を深く理解するためには、地域研究や文化研究、宗教学、文学、歴史学、社会学など、様々な学問分野から学際的アプローチが必要になるだろう。キリスト教文化の諸相を明らかにすることは、諸宗教と諸文化との関わりの中で追求することでもある。本稿で取り上げた「ヨーロッパのまち並みとキリスト教文化」とは、旧市街と新市街の仕組みや、広場のカフェ文化に影響を与えた石畳のまち並みや、石造の教会建築、まちの中心に建てられた教会など、ヨーロッパでは見慣れた景観の中に、その地域にあるキリスト教文化を、その風土や歴史、芸術、建築との関連性から考察する試みをした。それは人間とその営為である文化、また様々な学術研究を、キリスト教の立場から改めて深く省察していく研究的立場である。ヨーロッパにおけるキリスト教文化を辿ることは、聖書にまつわる絵画や音楽、教会建築について理解を深めることにとどまらず、どのような歴史的背景から芸術が生まれたのか、各時代の地域の歴史や思想、文化を知り、それは今日の社会を理解することにもつながるのである。